

研究資料

八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載一

宮 次男

八幡縁起諸本略解

八幡縁起諸本の構成は本誌三三六号所載の表に示す通りであるが、諸本略解をのべるに際して欠脱及び、錯簡あるものは現状を示しておく。

甲類本 八幡大菩薩御縁起

サンフランシスコ・アジア美術館本 一卷

紙本着色 縦二九・八cm 全長一四二・八cm

第一段の詞書および絵の一部を欠く。第六段の詞書は(9)の詞章を書くが、絵は海辺に建つ神社の景観である。詞と絵が同一の料紙に書かれているので、本巻制作当初から、このような組合せであったことは確かで、恐らく、本巻の祖本がすでに錯簡を呈していたのをそのまま写したものと考えられる。

第七段の詞書は、本巻だけにある大菩薩紀伊国垂跡にまつわる内容で、絵は前段の絵、すなわち(9)の産屋である。

〔奥書〕 巻末の一紙には右下に「達子」とあり、軸付に近い所に左の年紀がある。

于時康応元年_{己巳}六月一日

康応元年(一一三九)は二月九日が改元であるので、この年紀には矛盾はない。

〔解説〕 詞書は片仮名交りで、その内容に重複するところや、前後の筋がたどり難い所があつて、未だ十分に整理されていない。また段を区切るに際し、必ずしも絵と詞の前後関係は考慮されておらず、一つの話譚の途中に絵が挿入されている。

また、その絵は、背景や環境を極力省略して、話譚の中心になる情景を描くに終始

している。これらの諸点は甲類本に共通するところである。

本巻の絵の描写は、草々のうちに描いたという感が強く、かなり粗略で、また古拙である。しかし、南北朝末期から室町初期にはこのような画体の絵巻がしばしば作られており、その意味から年紀を有する本絵巻は貴重である。

〔参考文献〕 梅津次郎「八幡縁起絵巻解説」国華七四〇号(昭和二十八年一月)。宮次男「八幡縁起絵巻」『新修日本絵巻物全集』別巻二(昭和五十六年二月)、これには全巻写真と詞書の翻刻がある。

靱淵八幡神社本 一卷

紙本白描 縦三〇・八cm 全長一七〇五・二cm

第一段の詞書の大半を欠く。絵は(2)の後半部、皇后の鳳輦に老翁が対応する場面を欠くが、この場面の図は錯簡して第五段絵の後半部に接続している。

第二段は(6)の磯童出現段、第三段は(7)、第四段は(9)、第五段は(10)・(11)と、第一段にあるべき(2)の後半部の絵、第六段は第二段に入るべき(3)、第七段は(4)・(5)で、第五段絵の後半以降、第六、第七段は、第一段に直結されるべき錯簡である。

第八段は(12)で、それ以降は錯簡はない。

〔奥書〕 本絵巻の制作に関する奥書はないが、次の修理銘が巻末に墨書してある。

御縁起彙軸及大破奉修覆施之当寺一代栄辨阿松敬白

于時寛政十_{戊午}十二月吉日

〔解説〕 詞書は片仮名交り文で錯簡を復元すると、巻頭一部の詞書を欠くといえ、殆ど完本ということが出来る。ただ、アジア美術館本の第七段詞書と同第六段絵はないが、甲類本系統の諸本にはこれらを備えたものがないので、むしろアジア美術館本が特殊な一本ということが出来る。

本巻の絵は白描であるが、その運筆には筆力があり、また水墨画風の淡墨が随所に用いられていて、しかるべき専門画家の手になるものと考えられる。このような画風の作品には、ともに白描である尾道の常称寺藏遊行上人縁起や、御影堂本一遍聖絵があり、南北朝時代における一作風を示すものである。

〔参考文献〕 亀田孜「靱淵八幡社の白描絵巻」同著『佛教説話絵の研究』(昭和五

十四年二月)、同書に全巻写真掲載。

国文学研究資料館本 一卷

紙本着色 縦二七・六cm 全長一三八九・七cm

第一段詞および絵の一部を欠くほかは、第六段までは完備する。しかし、第七段の詞書はそこにあるべき(10)の詞章後半と(11)の詞章を欠き、絵は次段にくるべき(12)の老鍛治の場面を欠いた、後半の竹葉上の童子出現場面が示されている。第八段は(13)、第九段は(14)、第十段は(15)で、結局、本絵巻は通行甲類本の第七段と第八段のそれぞれの一部を欠いていることになる。

〔奥書〕

奉寄附

大日本国周防国吉敷郷

今八幡大菩薩御宝殿者也施主心中

求願一々皆令満足故也

于時文正元年戊戌十二月二日施主白敬

〔解説〕 詞書は甲類本には珍しく平仮名交り文で、その内容は他本と同じである。

絵の色彩は淡く、墨色が多い。形態にとらわれず、稚拙な表現であるが、描線は淀みなくのびのびと引かれ、人物の面貌にみるべきものがある。奥書通り、文正元年(一四六六)の制作と考えてよい作品である。

淡路島浜天神宮旧蔵本 一卷

紙本着色 法量は未測定。

第一段詞書の巻頭に「八幡大菩薩御縁起」の内題があり、詞十一段、絵十段(第十一段の絵はなし)で首尾完備している。

〔奥書〕

右御縁起檀越安宅口河守吉安

大永七丁五月吉日

〔解説〕 首尾完結し、片仮名交り文の詞書をもつ通例の八幡大菩薩御縁起である。

八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載一

奥書にみる安宅吉安は、大永六年(一五二六)に洲本城を築城、翌七年に炬口八幡宮に縁起一卷と甲冑を寄進した安宅治興の一族と考えられる。本縁起が大永七年に奉納されたのも、一族をあげての事業の一連と推察される。なお、本絵巻を納めた箱の蓋表に、

淡路島 浜天神宮旧蔵大永七年銘

八幡大神宮縁起絵巻

と墨書した貼紙があり、これによって、浜天神宮の蔵品であったことが知られるのである。

絵は粗野な描写を示すが、そこには一種の民芸的稚拙美があり、大永七年の年紀は他の類似作風の作品の制作年代を推定するうえの指標になる。

天理図書館本 二巻

紙本着色 上巻 縦三〇・六cm 全長一一二二・〇cm

下巻 縦三〇・六cm 全長一一七七・八cm

上巻 詞絵共に七段、下巻、詞五段、絵四段で構成され、上巻巻頭と下巻巻末にそれぞれ「八幡大菩薩御縁起」と題されている。その内分けは、上巻は(2)〜(9)、下巻は(10)〜(15)である。表に示す通り他本とは分段法が異なっているところがある。

〔奥書〕 尾題に続いて左の通り書かれている。

右此御縁起新写之事前如此之

本雖在之為盜賊令失墜訖其

後連々可新調旨雖存且風情且

世務被纏且空年月風奉責

皇后大菩薩威光又国土安全万

民快樂畜所祈是可也重而

希願預此懇志之得益二世大願令

成就円満玉へ

岩享祿第四曆歲次辛卯林鐘中澣

大和州添上郡御陵

金剛佛子良尊敬白

〔解説〕 詞書は平仮名交り文で、甲類本では珍しい。また、上巻第四段、(6)磯童出現に際し、豊姫が描かれていること、第七段の(9)産屋が重層であること、下巻第一段の(10)しるしの松に斎垣がめぐらされていることは本巻の大きな特色である。

絵の描写は素人風の稚拙な表現であるが、奥書の享祿四年(一五三二)の年紀は信ずべきものと考えられる。なお、本絵巻の詞書は『室町時代物語大成』第十卷(昭和五十七年二月)に松本隆信氏により翻刻されている。

逸翁美術館本 二巻

紙本着色 上巻 縦二七・〇cm 全長六三六・四cm

下巻 縦二七・〇cm 全長八二三・二cm

上巻 詞六段、絵五段、下巻 詞五段、絵四段であるが、上下両巻にわたって逸脱、錯簡が多い。現状にあわせて天理本で校合すると次のようになる。

上巻

第一段詞——〔天理本〕下巻第二段前半と下巻第一段後半、絵——下巻第一段

第二段詞——下の四段前半と上の一段末尾、絵——上の一段

第三段詞——上の二段、絵——上の二段

第四段詞——上の三段、絵——上の三段

第五段詞——上の四段、絵——下の四段

第六段詞——下の五段前半、絵欠

下巻

第一段詞——下の四段後半、絵——上の四段

第二段詞——上の五段、絵——上の五段

第三段詞——上の六段、絵——上の六段

第四段詞——上の七段、絵——上の七段

第五段詞——下の五段後半から尾題「八幡大菩薩御縁起」まで

〔解説〕 右のようになりに欠脱、錯簡があるようであるが、絵の欠脱は天理本下

巻第二段の(12)鍛冶翁と童子出現、下巻第三段の清麻呂の宇佐宮参詣の二段にすぎな

い。

詞書は天理本同様、平仮名交り文であり、絵もまた天理本で指摘した図様上の特色が逸翁本でも指摘できる。そして、詞書の書体は雄渾で力強く、絵は剝落損傷甚しいが、描線は細く暢達して軽快に引かれている。また、人物の形態や表情も的確に描き出されていて一種の気魄すら感じられる。その制作は十四世紀も、末期を下らないものである。

八幡奈多宮本 二巻

紙本着色 上巻 縦二八・四cm 全長七八七・九cm

下巻 縦二八・七cm 全長七一三・九cm

上巻巻首と下巻巻末に内題と尾題をつけ、片仮名交り文の詞書で、上巻、詞絵共に六段、下巻、詞絵共に五段であるが、上巻第二段は、(3)牛窓伝説の絵に、(7)の海戦場面がつづいており、これは錯簡である。

〔奥書〕 上巻 巻末軸止め近くに左の通りあり

右此本依秘藏雖難有借用申請了

本三重郷門田村歎喜庵

巧忠沙門在判

筆者存益在判

絵 存麟在判

下巻は尾題「八幡八菩薩御縁起之終」に続いて、

右彼御縁起ハ丹後国一宮宝蔵ニ籠テ有シヲ

不思議ノ依御縁難去申出写畢輕々敷不可

有披見奥書有之深蜜々々

或經説云黒豆ト芥子ハ神通物也然ニ皇后

黒豆十五石海ニ放シケレハ甲鎧着タル武者ト

成テ異国責ト也是神変不思議也其謂難

有秘事也

応永廿八年正月写之

永祿三年^巳末十月写之

三重郷歛喜庵

本願 巧忠在判

生年七十歳

筆者 存益在判

繪筆ハ存麟在判

とある。

〔解説〕 奥書に示すように、本絵巻は、丹後国一の宮の蔵本を応永二十八年（一四二二）に写したのから、さらに永祿三年（一五六〇）に豊後国大野郡三重郷田村歛喜庵の沙門巧忠が願主となり、詞筆者存益、繪筆者存麟が担当して転写したものであることが知られる。これらの人物については不明であるが、制作年代と制作関係者が判明していることは貴重である。

上巻第二段の後半海戦図は、本来、上巻第五段の前半に位置する場面であるが、牛窓伝説の図と同一料紙に描かれているので、本絵巻が転写された時、すでに原本がこのような錯簡の状態であったことが窺われる。絵の描写は、粗雑な描法で、素人の筆のようにみられるが、一種の稚拙美もあって、好感がもたれる。また、上巻に出現する住吉明神の化身の翁が、いずれも鎧を着用していることは、本巻の特色とする所である。また、下巻巻末の奥書のあとに箱崎八幡の景観が描いてあり、或は、後世の補入とも考えられるが、この場面は他本にはみられず、本巻の特色となっている。

〔参考文献〕 真保享「八幡大菩薩御縁起（杵築市奈多宮）」文化庁編『宇佐・国東半島を中心とする文化財』（昭和四十四年三月）に解説と詞書翻刻が収載されている。

なお、奈多宮本と同系統の作品が、昭和三十八年六月と昭和六十一年十一月の東京古典会古典籍展に二度出陳されており、その奥書には応永二十八年正月 日、同三十年九月十五日、永享八年六月十八日、同九年七月 日、同十一年七月十三日にいずれもこれを写したとある。応永二十八年正月は奈多宮本の原本と同じ年紀であり、注目される絵本である。

乙類本 八幡宮縁起

神功皇后縁起 二巻 大阪 誉田八幡宮

八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載一

紙本着色 上巻 縦三五・五 cm 全長二二七九・一 cm

下巻 縦三五・四 cm 全長二一四二・九 cm

上巻 詞絵共に五段、下巻 詞絵共に五段。

奥書は前記したので略すが、上、下巻共、巻末に別紙に左の極書がある。

神功皇后御縁起絵土佐光信真筆也

寛文六年林鐘中句 法印狩野探幽 「法印生明」（白文方印）

〔解説〕 前記した奥書の示すように、本絵巻は永享五年（一四三三）に足利義教によって誉田八幡宮に奉納されたもので、探幽はその筆者を土佐光信と鑑定しているが、永享五年は光信の時代よりも逆る年代である。絵の作風は、応永二十一年（一四一四）の寂済ら筆清涼寺本融通念仏縁起に近い緻密な描写を示すもので、当時の絵所の主要な絵師の手になるものと推察される。

これに関連して、同じく義教が同年に石清水八幡宮に奉納した石清水本は、昭和二十二年、神庫の火災で消失したが、その図様を写真などでみると、構図などの配置は誉田本に極めて類似している。しかし、誉田本の方が人物の数も多く、また、その動勢も誉田本の方が勝れている。石清水本は絹本のためかあまりにも謹直な描写のように見られる。

なお、誉田本には、他本いずれにもみられる¹³⁾和気清麻呂宇佐八幡宮参詣の段がない。また、誉田本の名称「神功皇后縁起」は、当本のみに名づけられたものである。その内容は八幡宮縁起と同じでありながら、かかる名称がつけられたのは、同社に、同時に奉納された「誉田宗廟縁起」と明確に区別されるためと考えられる。

東大寺八幡宮縁起 二巻 奈良 東大寺

紙本着色 上巻 縦三三・七 cm 全長一六九八・一 cm

下巻 縦三三・六 cm 全長一七九六・三 cm

上巻 詞絵共に五段、下巻 詞絵共に六段。奥書は前記したので略す。

〔解説〕 三条西実隆筆の奥書によると、本絵巻は祐全法師の勧発によって、詞は公順、絵は宗軒が書き、天文四年（一五三五）八月十五日に東大寺八幡宮に奉納されたことがわかる。他本にある14石清水勧請の代りに、東大寺勧請の段が最後にあつ

て、これが東大寺八幡宮の縁起であることが示されている。

絵は金泥を多く使用した濃彩で、室町末期の南都絵に共通する作風を示し、明快な表現がみられる。しかし、全体に雅味に乏しく、最後の東大寺勧請の絵は、オリジナルな場面だけに、一層南都絵の特色が顕著に見られる。

〔参考文献〕 奈良国立博物館編『社寺縁起絵』（昭和五十年十月）の中野玄三氏解説、同書に全巻写真掲載

由原八幡縁起 二卷 大分 柞原八幡宮

紙本着色 上卷 縦三五・〇cm 全長一七八三・七cm

下卷 縦三五・〇cm 全長一八七一・五cm

上卷 詞絵共に五段、下卷 詞絵共に六段で、最後の段は柞原勧請の段となり、前記東大寺本と同様、柞原八幡宮の縁起として制作された。奥書は前記したので略す。

〔解説〕 奥書によると、絵が土佐光茂、詞書は二品親王ということがわかるが、この二品親王はそこに書かれている花押によると、青蓮院尊鎮親王で、この花押は「本願寺文書」一にある正月廿八日付の庁務法印経乗が本願寺にもたらした御書の花押に一番近い。しかし、この文書には年号の記入がないので、何時のものか明らかでないが、史料編纂所では天文十八年（一五四九）の文書として扱っている。また、同編纂所の黒田日出男氏の御示教によると、経乗は鳥居小路大藏卿経乗で、『石山本願寺日記』上巻の天文八年（十八年）十二月十五日まで登場し、天文十八年十二月十五日頃に死去しているというから、この文書は天文十八年正月以前のものであることは明らかである。一方尊鎮は『華頂要略』によると天文十九年九月十三日に死去しており、恐らく、尊鎮晩年の花押とみてよいであろう。したがって、絵巻の制作年代も、およそ、その頃と推定できるのである。絵の作風は光茂筆の享祿四年（二五三二）作当麻寺縁起や、翌享祿五年作桑実寺縁起に比べて、色彩に重厚さが乏しく、人物の動感がにぶく感じられるが、描線や人物、事物の形態は共通するもので、光茂作として、この奥書を信用してよいと考えられる。

〔参考文献〕 渡辺文雄「伝土佐光茂筆大分由原八幡宮縁起絵巻について」大分県

立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要二（昭和六十年三月）、この論文には全巻写真と詞書の翻刻が掲載されている。